

令和2年度 東国文化自由研究レポート



研究テーマ

日本のポンパイ群馬の魅力再発見

～本場ポンパイをも凌ぐタイムカプセルの数々～

提出日 令和2年8月24日



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年 4組 11番

氏名

小林 香穂

1 はじめに

2018年12月、家族でマルタ共和国と南イタリアを旅行した。中でも最も楽しみにしていたのはポンペイ遺跡に行くことだった。約2000年前の火山噴火で一夜にして覆われ、1748年に発見されるまでタイムカプセルに包まれていた都市をぜひ自分の目で見てみたいと思った。ローマのレオナルド・ダ・ヴィンチ国際空港からレンタカーに乗って南へ約3時間ドライブすると、青空の中にベスビオ火山が姿を現し、さらに30分ほど行くと、いよいよ目的地のポンペイ遺跡に到着した。入り口から左手に巨大なアポロ神殿がそびえ立っているのが見え、さらに前に進むと5000人も収容できたという大劇場があり、こんな巨大な施設が埋もれるほどの火山噴火の激しさは、想像を絶するものだったに違いないと思った。



ポンペイ遺跡から望むベスビオ火山

火山噴火といえば、2018年1月23日に起きた草津白根山の噴火が衝撃的だった。約3000年ぶりに起きた本白根山の噴火により、多くのスキーヤーが山頂付近の取り残され、噴石による死傷者も出るなどして、火山の恐ろしさを身近に感じた。日本には111の活火山があり、県内には浅間山、草津白根山、榛名山、赤城山の4つが指定されている。群馬の先人たちも、ポンペイの人たちと同じような経験をしていたのではないかと思い、調べてみると、1994年に『黒井峯遺跡 -日本のポンペイ（日本の古代遺跡を掘る）-』¹という本が出版されていることがわかった。実際に黒井峯遺跡がある渋川市に行ってみると、「日本のポンペイ」の看板が掲げられている。また、インターネットで検索すると「日本のポンペイ、群馬県嬭恋村鎌原」の文字が複数ヒットする。群馬には複数の「ポンペイ」が存在することが分かった。



しかし、この事実をどれほどの人が認識しているだろうか。正直、私が群馬に「日本のポンペイ」と呼ばれている場所があることを知ったのは、本場ポンペイの旅から帰った後だった。こんなに身近に「日本のポンペイ」があるなら、もっと多くの人に知ってもらいたい。そのためには、まず、火山災害で埋もれた群馬の遺跡についてもっと学ばなければならないと思った。イタリアとはまったく異なる歴史を歩んできた日本の遺跡ならではの良さも、きっとあるはずだ。そこで、本研究では、群馬の遺跡には本場ポンペイをも凌ぐ魅力があることを明らかにし、郷土群馬の発展の一助としたい。

2 ポンペイ遺跡の魅力

① 歴史

ポンペイは紀元前 89 年にローマの植民都市となり、港を有する商業都市として栄えた。ぶどうの産地でもあり、ワイン作りも重要な産業となっていた。紀元前 62 年 2 月 5 日に大地震が襲い、大きな被害を受け、復興作業が終わらないまま、紀元前 79 年 8 月 24 日にベスビオ火山が大噴火を起こした。翌 25 日に火砕流が発生し、ポンペイは完全に地中に埋まった。直後にローマ皇帝ティトゥスは役人を派遣するが、街は壊滅し、なす術もなかった。約 2 万人ほどいたポンペイ市民の内、約 2 千人が犠牲になったと考えられている。1738 年にポンペイは発見され、その後、断続的に発掘調査が行われ、現在も続けられている。

② 時空を超えたタイムカプセル

現在のローマ市内には、フォロ・ロマーノなどのローマ帝国時代の遺跡が多数残されている。しかし、ローマ時代の都市が丸ごと一つ、手付かずの状態に残されている例は他にない。ポンペイ遺跡はまさに巨大なタイムカプセルと言える。時速 100km を超える高熱の火砕流が一瞬にして街を飲み込んだため、火山灰の中に腐敗消失した人々の空洞が亡くなった時の姿ででき、そこに石膏を流し込むことで、最後の瞬間を生々しく再現することができる。右の写真からは、穀物倉庫の中で座ったまま最後の時を迎えた人の姿を見ることが



居酒屋

ができる。また、左の写真のような居酒屋が約 90 軒見つかっており、街の賑わいが伝わってくる。その他



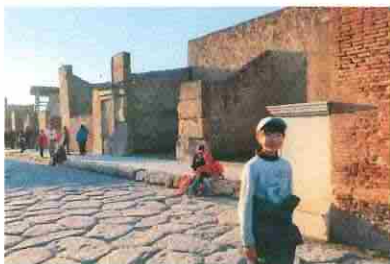
穀物倉庫

にも、洗濯屋、パン屋、浴場などの生活を支える施設や、フォロ（公共広場）や神殿などの政治、宗教の中心の場、また、

劇場、円形闘技場など娯楽施設などから、現在にも劣らぬ高度な都市づくりが行われたことが分かる。

③ 日本の遺跡と大きく異なる点

ポンペイの街を歩くと多くのモザイク画を目にする。モザイク画は石や陶磁器、ガラスなどを並べて描いているため、木や石などに描いた絵に比べて劣化が少ない。日本においても土器や古墳の石室に描いた絵が見つかることが



レンガの家と石畳の道

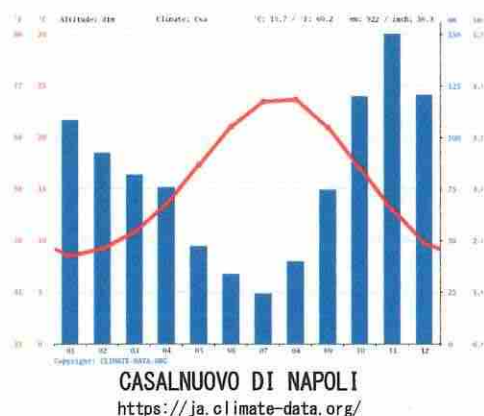
あるが、数や保存状態



猛犬に注意

においてポンペイの方が優位に立っているといえる。また、右の写真の犬のモザイク画をよく見ると「Cave Canem」（猛犬に注意）と書かれているのが分かる。文字の使用が日本よりも早く、保存状態も良いため、遺跡からより多くの情報を得ることができる。さらに、左の写真

から分かる通り、レンガで家が造られているため、木や茅などで家を造る日本と比べて保存状態が非常に良い。石畳の道は自動車を用いる現在においても利用できるだけの強度があり、イタリア各地でローマ時代から今も使われている道を目にすることができた。



保存状態について、もう一つ重要な要素が気候だ。イタリアも日本も同じ温帯に属するが、さらに細かく分類するとイタリアは地中海性気候で、夏乾燥し、冬に雨が降るという特徴を持つ。左の雨温図はポンペイに近いナポリのものだが、年平均気温 15.7 度（前橋 14.6 度）、年降水量 922mm（前橋 1248.5mm）で、降水量が少なく、乾燥していることが分かる。建築に用いることができる木材が少なく、夏の強い日差しでも快適に過ごせるように、石やレンガの家が好まれる

ようになったと考えられる。湿気は遺物の劣化につながるが多いため、このことから日本より乾燥しているポンペイの方が保存という面で優位に立っていることが分かる。

<コラム： 歴史の教科書に載っているあの有名な絵>



ナポリ国立考古学博物館蔵 ポンペイのモザイク画



誰もが知っているアレクサンドロス大王の絵だが、それから約 400 年後に生きたポンペイの人が描いたものだった。

イッソスの戦い（紀元前 333 年）

左が騎馬に乗るマケドニアのアレクサンドロス大王
 右が戦車に乗るペルシャのダレイオス 3 世

3 火山と共に生きる群馬の人々

① 調査方法

火山災害と関係の深い県内の遺跡について『群馬県遺跡大事典』ⁱⁱⁱや『新世紀ぐんま郷土史辞典』^{iv}で調べたところ、非常に多くの遺跡があり、短期間ですべてを調査することは不可能なことが分かった。そこで、『東国文化副読本～古代群馬を探検しよう～』^vに載っている異なる時代の特にな有名な遺跡を選び、主に夏休みを利用し実際に現地に行って、ポンペイにはない遺跡の魅力について調べることにした。現地では学芸員などの専門家の方々に直接お話を伺いたかったが、新型コロナウイルスの影響を考慮し、質問したいことをアンケートにまとめて手渡し、後日、記入したものを郵送していただく方法をとることにした。今回、現地調査を行った遺跡については次のページの表や地図に示した。また、これらの他に、遺跡に特に関係する嬭恋郷土資料館、かみつけの里博物館、群馬県埋蔵文化財調査事業団「発掘情報館」に行き、展示見学や資料収集、アンケートによる聞き取り調査を実施した。

現地調査を行った遺跡と火山活動との関連

年代	ベスピオ火山の主な活動	群馬の主な火山のテフラ	記号	現地調査を行った遺跡
紀元前 4~5000年前	縄文時代中期	浅間D軽石	As-D	
217年	大規模噴火			
紀元 62年 2月5日	大地震			
79年 10月頃?	大規模噴火、火砕流でポンペイ埋没			ポンペイ遺跡
432年	大規模噴火			
3世紀末	弥生時代	浅間C軽石	As-C	日高遺跡
5世紀	古墳時代	榛名有馬火山灰	Hr-AA	保渡田古墳群、下芝谷ツ古墳
6世紀初頭	古墳時代	榛名ニッ岳渋川テフラ	Hr-FA	中筋遺跡、金井東裏遺跡
6世紀中葉	古墳時代	榛名ニッ岳伊香保テフラ	Hr-FP	黒井峯遺跡
1108年	平安時代	浅間Bテフラ	As-B	
1631年 12月16日	大規模噴火 (死者約3000人)			
1783年 (天明3年) 江戸時代		浅間A軽石	As-A	鎌原観音堂
1822年	噴火 (噴煙1.4Km)			
1944年 3月22日	サン・セバスティアーン村埋没 (最後の噴火)	(浅間山の活動は現在も続く)		

※ テフラ記号は新井房夫編『火山灰考古学』を参照

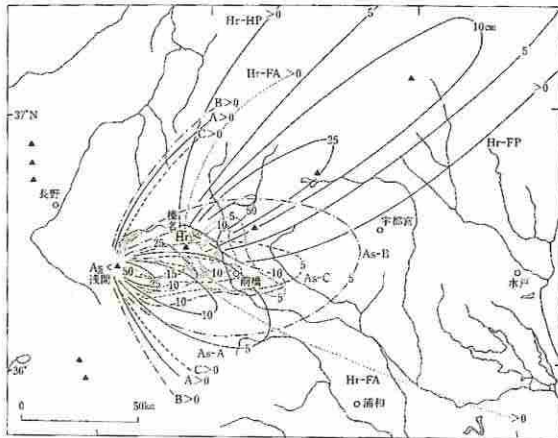
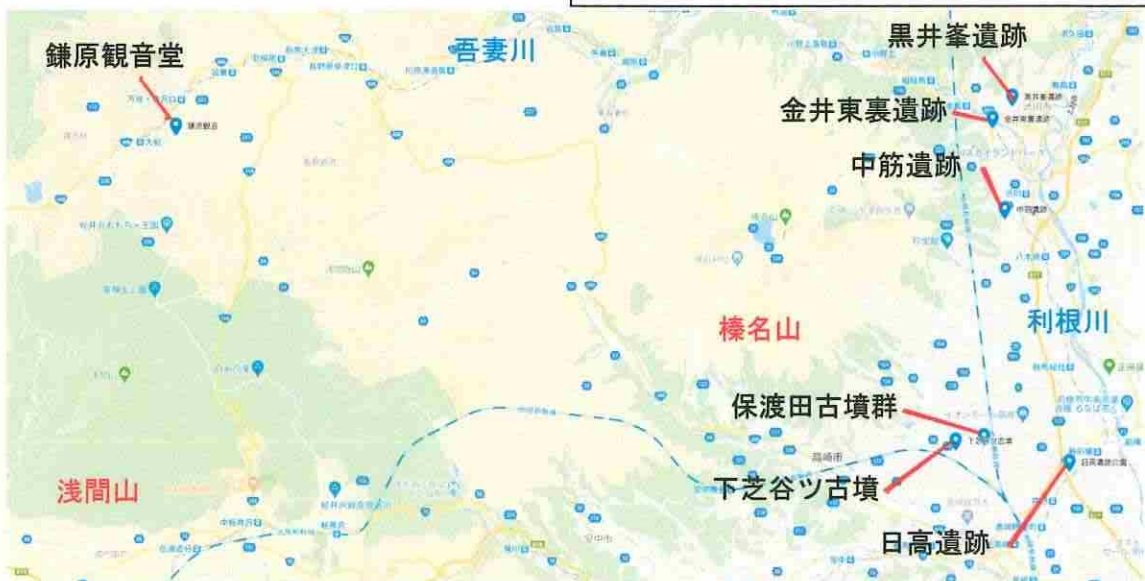


図5 北関東の縄文時代以降の代表的なテフラの等層厚線図。テフラ名称『火山灰考古学』より引用

＜現地調査を行った遺跡について＞

火山噴出物の内、溶岩を除くものをテフラと呼ぶ。左の新井房夫氏が分類した図によると、浅間山のテフラは東方向、榛名山のテフラは北東方向に飛散していることが分かる。鎌原観音堂を襲った岩屑（がんせつ）なだれと呼ばれる低音の火砕流は土石流となって吾妻川や利根川流域の村々を襲ったため、川との位置関係も重要となる。黒井峯遺跡は Hr-FP 軽石の影響を受けており、その厚さは2mにも達した。中筋遺跡や金井東裏遺跡を襲ったのは Hr-FA 火砕流で、逃げる間も無く被災したことが考えられる。保土田古墳群や下芝谷ツ古墳が造られた頃に榛名山は活動期に入っているが、被害は小さかったものと考えられる。日高遺跡は As-C 軽石に埋没しているが、浅間山との距離からも噴火の巨大さが分かる。



Google マップ 2020

② 現地調査の結果

◇ 災害を乗り越えた鎌原村

1783年7月8日、浅間山の噴火による岩屑なだれにより村全体が埋没した。住民570名のうち477名が死亡し、93名が助かった^{vii}。50段ある観音堂の石段を登り切った住民は助かったが、上15段を残して埋もれたしまった石段からは2人の女性の遺体が一人がもう一人を背負う格好で発見され、悲劇を今に伝えている。



鎌原観音堂と埋もれた石段



浅間のいたずら鬼の押し出し

生き残った村人たちは大笹村の名主黒岩長左衛門らの支援を受けて、家柄や身分の差を取り払って親族の誓いをした。妻や夫を亡くした者同士で家族の再編が行われ、村の復興が行われた。復興が行われなかったポンペイとの違いがここにある。また、高温の火砕流で被災したポンペイと異なり、岩屑なだれによる被災だったため、遺物の残存状況が良いことが孺恋郷土資料館の展示物から分かった。

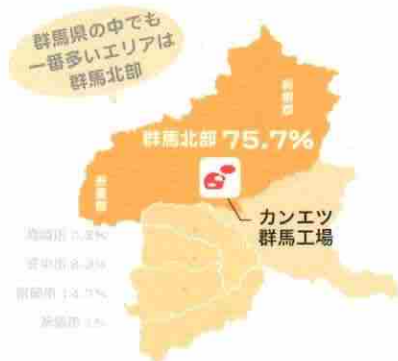
◇ 軽石に埋没した村、黒井峯遺跡

遺跡は榛名山とは吾妻川を挟んで反対側高台に立地し、広々とした平原の下に広がっている。いくつかの案内版を除くと、ここが遺跡であることを示すものはない。竪穴住居の他に地面を掘り下げない平地建物が見つかったことや古墳時代の稲穂がそのまま見つかったなど、注目される遺跡のわりに、整備が進んでいないのが残念だ。遺跡を再現したVRや解説動画が公開されていて、解説がとてもわかりやすく、その点はとても良いと思った。



黒井峯遺跡と榛名山

周囲を歩いてみると蒟蒻畑が広がっているのが気になった。土を触ってみるとたくさんの軽石が混ざっていた。軽石混じりの土壌が蒟蒻栽培に適しているようだ。蒟蒻製品を扱う株式会社関越物産のウェブページによると、全国の蒟蒻芋の90%以上が群馬県で生産され、さらにその中でも、群馬北部のエリアが県全体の75%を占めている



軽石層の上に広がる蒟蒻畑
手には小さな軽石

るそうだ。軽石混じりで稲作

には悪条件を逆手にとり、収益率が高いといわれる蒟蒻を特産物にまで押し上げた先人たちの知恵に感銘を受けた。榛名山の噴火がなければ、蒟蒻は群馬名産にはならなかったかもしれない。火山災害がもたらす恩恵もあることに気づくことができた。

◇ 甲を着た古墳人、金井東裏遺跡

吾妻川右岸の榛名山側の高台に遺跡はあった。黒井峯遺跡からの移動中、蒨蕪畑がいたるところに広がっていた。Hr-FP 軽石の露頭を見てみたいと思い、工事現場や崖を探してみたが発見できず、この遺跡でついに発見することができた。黒井峯遺跡近くの畑で見つけた軽石よりも何倍も大きな軽石が層を成していて、榛名山に近い方が軽石が大きくなることが分かった。



遺跡内の Hr-FP 軽石露頭



高架橋下の金井東裏遺跡

この遺跡は軽石ではなく、それより前の噴火で発生した火砕流で埋もれたものだ。甲を着た古墳人の発見は前例がなく、世紀の発見として話題となった。1日限定で行われた遺跡の一般公開には全国から3000人も集まったというが、今はその面影はなく、遺跡はすっかり埋め戻され、周囲は静まり返っていた。各遺構の発見現場が看板で示され、様子をわずかに伝えている。

後日、遺物が見学できる発掘情報館に行った。甲は1800枚もの小札(こざね)という小さな鉄板を綴り合わせたとても手が込んだもので、赤色に着色されていることが分かった。発見された骨から様々な情報が得られていて大変興味深い。この古墳人は身長164cm、40歳代前半の男性で、顔に渡来系の特徴が見られるという。西日本から群馬にやってきたことや、乗馬をして、左利きで、弓矢を使用していたことなどが分かっている^{viii}。また、同じ遺跡から首飾りをした20~30歳ぐらいの女性や、乳児、幼児も発見されており、古墳時代の研究を大きく前進させる発見と言われている。甲を着た古墳人に先導されながら女性や子どもたちが避難しているところに、突然火砕流が襲いかかるという悲劇の状況が生々しく伝わってきた。鎌原と同様に、高温の火砕流で被災したポンペイと異なり、人骨などがしっかりと残っていて、より詳しい情報を引き出すことが可能な貴重な遺跡であると考えられる。調査報告書が出されたばかりで本格的な研究はこれからだが、大いなる可能性に満ちた遺跡だと感じた。



1号甲(発掘情報館)



発見状況の再現(発掘情報館)

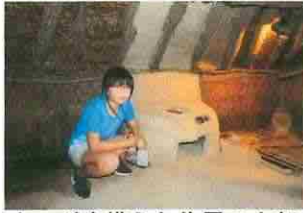
馬をして、左利きで、弓矢を使用していたことなどが分かっている^{viii}。また、同じ遺跡から首飾りをした20~30歳ぐらいの女性や、乳児、幼児も発見されており、古墳時代の研究を大きく前進させる発見と言われている。甲を着た古墳人に先導されながら女性や子どもたちが避難しているところに、突然火砕流が襲いかかるという悲劇の状況が生々しく伝わってきた。鎌原と同様に、高温の火砕流で被災したポンペイと異なり、人骨などがしっかりと残っていて、より詳しい情報を引き出すことが可能な貴重な遺跡であると考えられる。調査報告書が出されたばかりで本格的な研究はこれからだが、大いなる可能性に満ちた遺跡だと感じた。

◇ 火砕流に埋没した村、中筋遺跡

住宅地の中に突如姿を現した古墳時代の復元住居。よく見ると竪穴住居と平地建物がある。夏は通気性の良い平地建物、冬は断熱効果のある竪穴住居で生活していたと考えられている。金井東裏遺跡と同じ火砕流によって村がまるごと埋没したことで、これまで不明だった古墳時代の住居構造が解明できたという、黒井峯遺跡と並ぶ重要な遺跡だ。



復元された竪穴住居



カマドを備えた住居の内部

竪穴住居にはカマドがあるが、これは朝鮮半島からやってきた渡来人が伝えた技術だという。カマドは東側にあったが、冬の季節風が北西から吹くため、風下にカマドを置くことで、住居内に煙が充満しないようにするためだと考えられている。7月下旬の雨上がりの日に行ったため、竪穴住居の中は湿気が高く、平地建物の方がやはり快適だと感じた。

県内に古墳は沢山あるが、古墳時代の人々の生活を体験できる場は少ない。火砕流を示す地層も展示されていて、解説も分かりやすかった。他に見学者はなく、あまり知られていないようだが、もっと多くの人に知ってもらいたい遺跡だと感じた。

◇ 渡来系の有力者を葬った下芝谷ツ古墳

教科書に登場することがあるほどの有名な古墳だが、行ってみると草に覆われていて、中に入ることができなかったのが残念だ。大変小さなこの古墳が一躍有名になったのは、金



金銅製飾履 (かみつけの里博物館)

銅製飾履が発見されたからだ。これは朝鮮半島の王の埋葬時に使うもの

で、渡来して間もない有力者がこの墓の主である可能性が高い。朝鮮半島の人々が九州や畿内を通り越して群馬までやってきていることが大変興味深い。朝鮮半島では日本ほど火山活動が盛んではないため、当時、活動を始めた榛名山を見て、さぞ驚いたことだろう。



草に覆われた下芝谷ツ古墳

◇ 火山活動が始まった榛名山の東麓を治めた豪族の墓、保渡田古墳群

榛名山の東麓には利根川と烏川に挟まれた平野が広がっている。稲作に適した豊かな地域だったに違いない。金井東裏遺跡よりも少し前の時代に古墳群は造られていて、榛名山の火山活動を感じながらも、大きな被害を受けていないのがこの時代と地域の特徴だ。しかし、6世紀前半の2度の噴火による土石流により被災して以降は大型古墳は造られなくなっており、このことが被害の大きさを物語っている。



復元された八幡塚古墳



三寺I遺跡復元模型 (かみつけの里博物館)

八幡塚古墳や二子山古墳は墳丘 100m級の大型のもので、葺石や埴輪が並べられ、造られた当時の姿が復元されている。古墳というと木で覆われた森のような所というイメージがあるが、実は本来の姿ではないことが分かる。この遺跡のさらに凄いとところは、近くで古墳の主であると考えられる豪族の館跡(三寺I遺跡)が見つかったことだ^{ix}。全国にはと

ても多くの古墳があるが、古墳の主の館が見つかる事例はなく、彼らがどんな生活をしてきたのか、謎に包まれている部分が多い。やはり、榛名山東麓は古墳時代の謎を解き明かすタイムカプセルの宝庫と言える。

かみつけの里博物館のエントランスには古墳時代の馬の模型が展示されていた。体高は1.3mほどで、現在の木曾馬程度の小さな馬だった考えられている。榛名山東麓からは馬を飼育していたと考えられ場所がいくつか遺跡として発見されている。榛名山の噴火によるテフラを丁寧に剥がすと、馬の足跡が発見されることがある。馬の大きさはこの足の大きさから推定されている。足跡までも保存してしまう精密なタイムカプセルが群馬にはある。



古墳時代の馬 (かみつけの里博物館)

◇ 浅間山の噴火で埋もれた水田、日高遺跡

3世紀末の浅間山の大噴火によって飛散した軽石 (As-C) によって覆われた弥生時代後期の水田跡が復元され、史跡公園として整備されている。水田の区画は現在のものより小ぶりだが、あぜは現在のものと同じようなしっかりしたものだ。田植えや稲刈り体験も行われており、弥生時代の農業を身近に学べる場になっている。実際の遺跡からは、足跡まで確認できる畔や堀で囲まれた集落、墓なども見つかった。弥生時代の人の足跡を復元したり、足跡から推定される弥生時代の人々の模型などを展示したりしているとさらに良いと思った。



復元された古代の水田

③ 聞き取り調査の結果より

嬭恋郷土資料館、かみつけの里博物館、群馬県埋蔵文化財調査事業団「発掘情報館」の専門家の方々に右の資料の通り質問を行った。以下に、ご回答いただいた内容を簡潔にまとめた。Q1～4について、群馬には火山由来の遺跡が多数存在しており、被災当時の様子がよくわかり、現在の防災にも役立てることができる。群馬の遺跡もポンペイもそれぞれ異なる特徴を有し、どちらが優れているというような比較はできない。Q5について、当時の街並みがしっかり残されていて、都市機能がよくわかる。Q6について、火山噴出物にバックされた状態の遺構は日本では珍しく、水田跡や建物跡、巨大な前方後円墳が多数見つかったこと。Q7～8について、「石の文化」と「木の文化」の違いや噴火の仕方の違いなどにより、それぞれ遺構や遺物として残されたものが違う。群馬の遺跡では被災後に人が戻ってきているという特徴がある。Q9について、自然の猛威に襲われた人々を気の毒に思うと同時に、今後も起こりうることなので、これらの経験を将来に活かしたい。Q10について、貴重な遺跡を保存し、後世に伝えることが大切。ポンペイと群馬は共通点が多いが、共に独自のアピールをしていけたら良い。

聞き取り調査質問項目	
Q1	群馬の遺跡が「日本のポンペイ」といわれている理由は何だと思えますか？
Q2	火山灰に埋もれた遺跡の魅力は何だと思えますか？
Q3	群馬の遺跡は、ポンペイよりも優れていると思えますか？ □まったく思わない □あまり思わない □どちらとも言えない □少し思う □強く思う
Q4	Q3の理由を書いてください。
Q5	ポンペイの魅力は何だと思えますか？
Q6	群馬の遺跡の魅力は何だと思えますか？
Q7	ポンペイにあり群馬の遺跡にないものは何だと思えますか？
Q8	群馬の遺跡にありポンペイにないものは何だと思えますか？
Q9	火山灰に埋もれた先人たちに対して、どのようなことを思えますか？
Q10	今後、日本の「ポンペイ群馬」をどのように発展させていくとよいと思えますか？

以上のような調査結果を踏まえ、ポンペイや群馬の遺跡から、被災当時の生活の様子や災害の恐ろしさなどを学ぶことができた。これからどんなに科学が発達しても、火山災害を完全になくすことはできないだろう。しかし、被害を最小限の押さえたり、被害に遭ってもそれを乗り越えたりするための知恵が遺跡には詰まっていると思う。遺跡をしっかりと残し、後世に伝えていくことの大切さを改めて学ぶことができた。

4 群馬の魅力さをさらに広めるためにできること

① ポンペイに学ぶ

イタリア政府観光局によると、ポンペイ遺跡の来場者数は約 338 万人 (2017 年) でコロッセオの約 703 万人に次ぐイタリア第 2 位となっている。群馬県の人口をはるかに上回る人々が毎年、ポンペイ遺跡を訪れている。スマートフォンを用いた音声ガイドなども充実していて、世界中の主要言語に対応している。現地で販売されているガイドブックは大人向けから子ども向けまで複数用意



現地で買ったガイドブック



私たちが泊まった農家

されていて、複数言語に対応しているばかりか、QR コードが付いていて様々な映像を楽しむこともできる。遺跡には遺物展示はほとんどなく、車で 30 分ほどの距離のナポリ国立考古学博物館に集中して展示されていて、こちらの博物館も多言語対応になっている。ナポリは大都市でホテルなどたくさんあるが、ポンペイの周りにはそういった施設はない。しかし、イタリアではアグリツーリズモ (agriturismo) と呼ばれる宿泊体験施設を備えた農家が充実していて、農村にあるポンペイの周りでも宿泊することができ、私たちが利用した。家畜に餌をやったり、畑で取れたものを朝食で味わったりすることができ、遺跡見学の他にも楽しい思い出ができた。

② 群馬の遺跡もポテンシャルは十分

スマートフォンが発達して、多言語に対応した音声ガイドのシステムが比較的簡単に整えられるようになってきた。群馬の遺跡でも積極的に多言語対応の解説を整えられると良い。また、黒井峯遺跡で行っているような動画解説や VR を他の遺跡でもさらに充実させていけると良いと思う。ポンペイの動画解説は内容や数において圧倒的に充実していて、世界中で視聴でき、ポンペイファンを増やしている。2013 年にイギリスの大英博物館が行った「ポンペイ展示」には半年で 170 万人が訪れ、『大英博物館ポンペイ展～ポンペイとエルコラーノ、その生と死～』という映画にもなり、世界各国で上映された。群馬の遺跡も内容的にはポンペイに負けないくらいのもがあると思うので、映像資料を充実させ、各国に配信できると良い。ポンペイファンの多くが、群馬の遺跡にも興味を持ってくれるはずだ。

見学施設もさらに充実させていけると良い。保渡田古墳群や中筋遺跡、日高遺跡のような当時の様子が再現され、体験できる施設をさらに充実させていきたい。また、ナポリ国立考古学博物館のような巨大な博物館に展示を集中させることも大切だと思う。小さな資料

館や博物館をいくつも時間をかけて回るとは意味のあることだが、地元以外の人々が短期間に「日本のポンペイ」群馬の魅力を1箇所ですべてに味わえるような火山災害に関する遺跡に特化した国立博物館をつくる必要があると思う。そして、宿泊施設だが、群馬でもアグリツーリズムを広めてはどうか。イタリアでは、こんにゃくでできたパスタがブームになりつつあり、そのこんにゃくが群馬産だと知れば、そんな群馬の農家に泊ってみたいと思う人も多くいるだろう。金井東裏遺跡はポンペイとは比べものにならないくらい小さな遺跡だが、1日に3000人もの人を集めた。そんな遺跡が複数の時代にまたがり、何箇所にも広がっている群馬のポテンシャルは無限大だと言ってもオーバーではないだろう。

5 おわりに

群馬の遺跡には本場ポンペイをも凌ぐ魅力があるはずだ。それらを明らかにすべく本研究を進めてきたが、主に次の三点について、群馬の遺跡の持つ大きな魅力を明らかにすることができた。一つ目は、軽石や火砕流等に襲われたものの、被災された方々の骨が残されていたため、それらから多くの情報を引き出すことができること。二つ目は、さまざまな年代の異なる火山の噴火、それも軽石や火砕流等の異なる種類のテフラによりパックされた遺跡があり、その範囲も広範囲に及んでいて、タイムカプセルの質、量、種類が充実していること。三つ目は、被災地域において復興作業がすぐに行われていて、埋もれてしまった遺跡の上で新たな生活が始められたことだ。生活が始められたことで、遺跡自体の残りはポンペイほど良くない部分はあるが、先人たちのたくましい精神から私たちが学べることは多いと思う。一方、遺跡の保存展示やPR、活用といった点において、本場ポンペイに比べて不十分な点が多いことも分かった。遺跡そのものの持つ価値は、本場ポンペイにも負けない素晴らしいものがあると思うため、それらをさらに充実していく必要があると強く感じた。

「日本のポンペイ」群馬の魅力をさらに分かりやすく多くの人々に伝えていくための具体的な方法については、本研究では十分に追究することができなかつたため、今後、さらに国内外の遺跡を実際に訪れ、調査を続けていきたいと思う。最後に、本研究にご協力くださいました、嬭恋郷土資料館、かみつけの里博物館、群馬県埋蔵文化財調査事業団「発掘情報館」の専門家の方々に深くお礼を申し上げます。

<脚注及び参考文献>

i 石井克己、梅沢重昭『黒井峯遺跡 -日本のポンペイ (日本の古代遺跡を掘る) -』読売新聞社、1994年。

ii 近年の発掘調査結果から、実際に噴火が発生したのは79年10月17日以降である可能性が指摘されている。

iii 群馬県埋蔵文化財調査事業団『群馬県遺跡大事典』上毛新聞社、1999年。

iv 近藤義雄、井上定幸、松島榮治『新世紀 ぐんま郷土史辞典』(財)群馬地域文化振興会、2003年。

v 群馬県『東国文化副読本～古代群馬を探検しよう～』2020年。

vi 新井房夫編『火山灰考古学』古今書院、1996年。

vii 村井 勇『浅間山-天仁・天明の大噴火-』浅間火山博物館、2017年。

viii 『埋文群馬』No.64, 群馬県埋蔵文化財調査事業団、2019年。

ix 『よみがえる五世紀の世界』かみつけの里博物館、1999年、『第19回特別展 豪族居館三寺I遺跡のすべて』かみつけの里博物館、2010年。